

**特集** 調査・研究からみる女性アスリートの現状とサポート

特集号“調査・研究からみる女性アスリートの現状とサポート”にあたって

土肥美智子<sup>1)</sup>

Michiko Dohi<sup>1)</sup>

近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタンが、オリンピック競技会において、「女性の競技スポーツは非常識で、興味をひくものではなく、美的でもない」と発言されたという。それは“女性蔑視”の結果であるとか、あるいは野蛮なスポーツから女性を守るための発言であるとか、研究者達が分析しているようであるが、その真意はともかく、いずれにしても第1回アテネ大会（1896年）では、女性の参加が禁じられ、第2回パリ大会（1900年）では参加が認められたが、女性らしいとされるテニスとゴルフ競技に限られ、全出場選手997人のうち女性は22人とどまったという。女性アスリートに関わる私としては、ピエール・ド・クーベルタン氏のこの発言は非常に残念であると申し上げるに止めるが、現実的にはこの約120年で女性アスリートのオリンピック参加者が0から男女比で約45%となり、国による格差はあるとはいえ、オリンピックへの女性アスリートの参加が全く珍しくない時代になったのである。日本でも過去4大会において男女比はほぼ半数となっている。このことは、女性アスリートはもちろん、女性アスリートのアントラージュ、研究者の戦いと努力が実った結果で

あると私は信じている。私が文部科学省(現スポーツ庁)の女性アスリートの支援や調査研究により関わりはじめてからの8年間に、この特集号に見られるように多分野において様々な調査研究が加速し、多くの成果が生み出されてきた。ある指導者の言葉を借りれば、現代において、調査研究は様々な技術によって、競技とアスリートというアナログな事象をデジタルに変え、具体化、可視化、客観化することを可能とした。しかしこの成果を現場で活用するにはアスリートに向けて再びアナログに戻す作業が必要で、それをするのが指導者の役目であると。つまり研究成果は、指導者やアスリートに伝えられ活用されなければ何の意味を持たないものになってしまうのである。このような観点から研究成果が広く周知され、現場に還元されることがこの調査研究に関わった人々の願いであり、この特集号を企画した所以でもある。この特集号には掲載されていない調査研究については、国立スポーツ科学センター(JISS)ホームページにポータルサイトを作成し、PDF版で情報を発信している。是非この特集号とともに一読していただき、現場で活用していただければ幸いである。

---

<sup>1)</sup> 国立スポーツ科学センター

<sup>1)</sup> Japan Institute of Sports Sciences

E-mail : michiko.dohi@jpnssport.go.jp

<https://www.jpnsport.go.jp/jiss/tabid/1313/Default.aspx>

今回の特集号および JISS ホームページでのポータルサイトの作成は、独立行政法人日本スポーツ振興センターがスポーツ庁から受託した、

平成30年度女性アスリートの育成・支援プロジェクト「女性アスリートの戦略的強化・支援プログラム」の事業として、スポーツ庁委託事業「女性アスリートの戦略的強化に向けた調査研究」にて得られた成果や知見を広く還元することを目的に取りまとめたものである。